人は誰でも、差別したり、差別されたりする存在

新聞書評の中に「人は誰でも『差別したり』『差別されたり』する存在なのではないか」という引用文が目に止まり、障害児問題、いじめ問題、虐待問題、高齢者問題、等々に通じる人間のもつ差別感の構造について、何かヒントになるものがあるのでないかと、「被差別部落の我が半生」を読んだ。

著者は、人は、自分のアイデンティティーが保てなくなり、自信がなくなると、より弱い立場のものを差別することで、安っぽい優越感と自己満足を得、つかの間の精神的バランスを保とうとしているのだという。また、差別とは、その相手を「嫌う」、「恐れる」、「遠ざけたい」、「軽蔑する」、「大切に思わない」、「関係を持ちたくない」、「同じだと見られたくない」、「そのような人にはなりたくない」、「その人の立場には置かれたくない」、「いてほしくない（存在が不愉快だ）」、「できれば無視したい」といった心理が働いて、相手を「からかったり、侮辱したり、敵対することである」という。そして、こうした心理は、人の生得的に持つ性質でもないかという。

しかし、「生得的に持つ性質だからといって『差別しても仕方がない』と居直るのでなく、普通そうはならないのは、人間の倫理的・道徳的な生来の性質がブレーキのように働くからである。」という。それが『ブレーキ』が効かなくなって、露わに言動に表れて相手の人権無視なると「差別」になるということのよう。

更に、「差別する側は、鈍感。差別される側は、敏感。」ともいう。確かに、我々は無意識で差別的な言動をしているかもしれない。著者はそれ故か、「個人の関係の中での言動であれば、黙っていないで、どうすれば差別がなくなるかを話し合うこと」を勧めている。それが公けの組織（行政、企業、団体、等）としての言動であれば、明らかに社会的差別であり、改善を強く求めて行くという。

タイガー・ウッズの母が差別に苦悶している息子に対して、「人種差別というのは、お前の問題じゃないのよ。差別する側に問題があるのよ。お前はただ立派に振る舞っていれば、それでいいの」と論した話に触れている。正に、差別は、差別する側の問題ということであろう。

言い換えれば、社会を構成する我々一人、一人が、お互いに自分の内なる差別感に敏感になり互いの人権尊重のため、「ブレーキ」を点検し効きをよくしておくよう、常に心しなくてはならないということであろう。

（2005 年 2 月 16 日　記）